

顧炎武「五方之音説」とその批判

―毛奇齡・錢大昕の所説を中心に―

渡 邊 大

はじめに

清代における上古音研究が、顧炎武⁽¹⁾（一六一三～一六八二）の『音学五書』⁽²⁾を出発点として、その古音十部説を精密化していくかたちで進展していったことは広く知られている⁽³⁾。本稿では、その『音学五書』中の一書である『易音』にみえる、乾卦・象伝についての顧炎武の説と、それに対する毛奇齡⁽⁴⁾（一六二三～一七一六）、錢大昕⁽⁵⁾（一七二八～一八〇四）らの批判を中心に、顧炎武の上古音研究が同時代や後世にどのように受け止められていったかについて考察する。どのような点においても、本稿の主眼は、上古音分部の学説史そのものにあるのではなく、その中に垣間見えてくるであろう、顧炎武の音韻観や清代学術のあり方、またそれを規制する儒教という枠組みに置かれているということ、を、まずあらかじめ確認しておいてから論に進みたい。

一、顧炎武の「五方之音説」

まず論議の対象となる『周易』乾卦の象伝を引く。（以下、問題となる字には傍点を付し、「」内にその字の『広韻』における所属韻目を記す。また四声については適宜省略する。）

大哉乾元、（上平二十二元）。萬物資始。乃統天、（下平一先）。雲行雨施。品物流形、（下平十五青）。大明終始。六位時成、（下平十四清）。時乘六龍。以御天、（下平一先）。乾道變化。各正性命、（去四十三映）。保合大和。乃利貞、（下平十四清）。首出庶物。萬國咸寧、（下平十五清）。

問題は「元」「天」「形」「成」「命」「貞」「寧」の押韻状況をどのようにとらえるかという点にある。顧炎武は、自

身の古音十部説の立場から、これら七字を素直に韻字とは認められないのである。『易音』卷之二「彖伝」の該当箇所にみえる顧炎武の見解をみてみよう。

按「眞」「諄」「臻」不與「耕」「清」「青」相通。然古人於「耕」「清」「青」韻中字往往讀入「眞」「諄」「臻」韻者當繇方音之不同、未可以爲據也。詩三百五篇並無此音。

孔子傳易於《屯》曰「雖磐桓、志行正、〔清〕也、以貴下賤、大得民、〔眞〕也」。於《觀》曰「觀國之光尚賓也。〔6〕觀我生觀民、〔眞〕也。觀其生志未平、〔庚〕也」。是「平」「正」皆從「民」字讀矣。

於《革》曰「天地革而四時成、〔清〕」。湯武革命。順乎天而應乎人、〔眞〕。於《兌》曰「說以利貞、〔清〕。是以順乎天而應乎人、〔眞〕」。於《節》曰「天地節而四時成、〔清〕。節以制度。不傷財。不害民、〔眞〕」。於『繫辭傳』曰「君不密則失臣、〔眞〕。臣不密則失身。〔8〕幾事不密則害成、〔清〕」。是「成」「貞」皆從「人」「民」「臣」字讀矣。

至屈宋亦多此音。『離騷』以名、〔清〕從均、〔諄〕讀。『卜居』以耕、〔耕〕名、〔清〕生、〔庚〕清、〔清〕楹、〔清〕從身、〔眞〕

讀。『九辯』以清、〔清〕平、〔庚〕生、〔庚〕聲、〔清〕鳴、〔庚〕征、〔清〕成、〔清〕從人、〔眞〕讀。而秦漢之書亦時有之。

又如「天」「淵」二字古與「眞」「諄」同韻者也。而《乾》象傳形、〔青〕成、〔清〕貞、〔清〕寧、〔清〕皆從天、〔先〕讀。《文言》正、〔清〕精、〔清〕情、〔清〕平、〔庚〕皆從天、〔先〕讀。《訟》象傳成、〔清〕正、〔清〕皆從淵、〔先〕讀。《大畜》象傳正、〔清〕從賢、〔先〕天、〔先〕讀。又《萃》象傳《臨》《晉》《姤》三象傳正、〔清〕從命、〔去四十三映〕讀。今吳人讀「耕」「清」「青」皆作「眞」音。以此知五方之音雖聖人有不能改者。此傳以平去通爲一韻。

『広韻』における「眞・諄・臻」の各韻は、「文・殷・元・魂・痕・寒・桓・刪・山・先・仙」の各韻とともに、顧炎武の古音十部説では、第四部に属している。一方、「耕・清・青」の各韻は、このほかに下平声十二「庚」韻の一部を加え、第八部に所属する。問題となる乾卦の彖伝に即して言えば、「元」「天」「命」は第四部、「形」「成」「貞」「寧」は第八部に属す字であり、これら七字に押韻關係を認めると、そこを媒介として第四部と第八部の隔てが崩れてしまう恐れがある。顧炎武としては素直には韻字と認められないわけである。しかし、その一方で、顧炎武自身も挙げて

いるように、『周易』や『楚辞』には、これらが押韻状況にあることを示す用例が数多くみられ、この乾卦・彖伝においても七字が押韻していることを認めざるを得ないのもまた事実である。そこで顧炎武は、この問題を当時の方言音に起因するものとして、いわゆる雅音からははずれた押韻例として処理したのである。「眞諄臻不與耕清青相通。

然古人於耕清青韻中字往往讀入眞諄臻韻者當緣方音之不同未可以爲據也（眞諄臻など第四部と耕清青など第八部に押韻しあうことはない。しかるに古人において耕清青など第八部の韻字の中に往々にして眞諄臻など第四部のものがまざるのは方言音によるものに違いなく、これらを拠り所として古音分部を決定することはできない）」というのは、その謂いである。

では、顧炎武が何をもとにして古音分部を考えたかということ、「詩三百五篇並無此音」「詩經」三百五篇の中にはこのような用例はひとつもない」ということが示すように、『詩經』であった。顧炎武は、『詩經』においては第八部所属字と第四部所属字が押韻する例がないために、『詩經』を基準として、『周易』や『楚辞』の方を方言による不規則な押韻例であるとみなしたのである。この文章の結びに置かれている「五方之音雖聖人有不能改者（方言の音には聖人であっても改めることのできないものがあつたのだ）」ということば

には、古音分部において最も基礎とすべき資料は『詩經』であるという顧炎武の姿勢が示されているのだが、この発言がその後、物議をかもしていくことになるのである。本稿では、これを「五方之音説」と呼ぶことにし、以下、これに対する批判をみていくことにする。

二. 毛奇齡による顧炎武「五方之音説」批判

毛奇齡は、顧炎武より十歳年下の、ほぼ同時代の人物である。その代表的著作である『古文尚書冤詞』が閻若璩の『尚書古文疏證』に対抗して書かれたように、論争好きで知られている。音韻関係の著作としては、『古今通韻』十二卷、『易韻』四卷が四庫全書におさめられている。その『古今通韻』の提要に、「是書爲排斥顧炎武音學五書而作」とあるように、顧炎武の古音十部説に対抗して古音五部説を唱えたが、その説は、「多くの資料を、時代を顧慮することなしに綜合したために、その各部が互に通ぜざるはななく、結局のところ、古音を明らかにする役には立たなかつた」ものであるという。

毛奇齡の古音五部説では、上古音を、第一（宮）部「東冬江陽庚青蒸」、第二（商）部「真文元寒刪先」、第三（角）部「魚虞蕭肴豪歌麻尤」、第四（徵）部「支微齊佳灰」、第

五(羽)部「侵覃塩咸」に分部しているが、これらが、いわゆる詩韻をもとにしたものであることが注意される。今、問題となつてゐる乾卦・彖伝の文字について、詩韻韻目と毛奇齡古音五部説における所属先をみてみると、元〔元・第二部〕、天〔先・第二部〕、形〔青・第一部〕、成〔庚・第一部〕、天〔先・第二部〕、命〔敬〔庚〕と相配する去声韻〕・第一部、貞〔庚・第一部〕、寧〔庚・第一部〕となり、顧炎武同様やはり部を異にしているのだが、毛奇齡はこれを両界説なるものによつて通韻とみなす。両界とは、入声韻をもつ部(第一部「東冬江陽庚青蒸」、第二部「真文元寒刪先」、第五部「侵覃塩咸」と、持たない部(第三部「魚虞蕭肴豪歌麻尤」、第四部「支微齊佳灰」)のことで、入声韻を持つ部同士(あるいは持たない部同士)に通押関係を認めるのである。毛奇齡はこのほかにも「三声」「両合」などの説を導入し、まさに互いに通ぜざるはなしという状態に陥つてゐる。そもそも顧炎武が、『詩経』の押韻例をもとに、その結果を『広韻』に投影するという、その後の上古音研究の基礎作業として受け継がれることになつた方法によつたのに対して、毛奇齡は詩韻により考察を進めている点で、両分部の優劣は明らかである。顧炎武の『詩本音』、毛奇齡の『古今通韻』という書名そのものが両者の立場を端的に示しているのだが、まことに四庫提

要『古今通韻』が、毛奇齡の説を評して「蓋其病在不以古音求古音而執今韻部分以求古音。又不知古人之音隨世變而一概比而合之(その欠点は、古音そのものから古音の体系を求めずに、今音に固執したことである。また古音というものは時代にしたがつて変化するものであるのに何もかも一緒くたにしてしまつたこともそうである)」という通りなのである。両分部の学説としての優劣はともかくとして、次に、毛奇齡による顧炎武批判をみよう。

毛奇齡は、『易韻』の序において、「顧氏……妄以隋代陋儒一時杜撰之作、反繩檢聖經、謂鄉音、謂土音、謂非正韻、則罪大惡極不可道矣(顧氏は……みだりに隋代の淺陋な學者の作つた杜撰な韻書をたよりに、あろうことか聖經を検証して、方言だの、なまりだの、正しい音ではないなどといつてゐるが、その罪の大きさは言い表せぬほどである)」と顧炎武を非難してゐる。これが、『易韻』なる書物の序におけるものであることから、顧炎武の「五方之音雖聖人有不能改者」という發言に対するものであるのは明らかである。実は、「鄉音」「土音」「非正韻」という表現そのものは顧炎武の『易音』には見当たらない。毛奇齡が、『易韻』の該當箇所、「顧氏不識韻妄云、天淵二字古與眞諄同韻者也。而乾象傳形成貞寧皆從天韻、即文言訟象大畜象俱然。此吳人讀耕清爲根

親之土音也。以是知五方鄉音、雖聖人有不能改者。」とこ
とさらに表現を変えて引用しているものなのである。さて、
この非難から見えてくるのは、単なる学説の対立ではなく、
『周易』という書物に対する両者の態度の違いである。毛
奇齡が顧炎武自身は用いていない「郷音」「土音」「非正韻」
ということばを用いたのは、聖經である『周易』を顧炎武
によつて愚弄されたと感じたからに違いない。すでに述べ
たように毛奇齡は喧嘩好きで有名であつた。毛奇齡が『経
問』において顧炎武、閻若璩、胡渭の三人のみを名指して
批判するのは、この三人だけが「博学重望」で攻撃するに
足るとみなし、他の人間は齒牙にもかけなかつたからであ
るという。⁽¹²⁾江藩『漢學師承記』において、閻若璩、胡渭が
劈頭に置かれ、顧炎武が掉尾を飾っていることなどを考え
あわせても、⁽¹³⁾自身の才能を恃む気持ちが一倍強い毛奇齡
にとつて、顧炎武は格好の喧嘩相手であつたといえるのだ
が、毛奇齡の『易韻』執筆の動機は、単なる功名心からで
はなかつたと考えられる。「謂郷音、謂土音、謂非正韻」
という表現は、書き付けるほどに増幅していく毛奇齡の怒
りをあらわしているようで、単なる修辭とは思えないので
ある。顧炎武の「五方之音説」に対するこのような反応は
毛奇齡だけに限つたことではない。これに関連して、次に、

顧炎武に宛てた帛莊⁽¹⁴⁾
る。⁽¹⁵⁾

兄前書自言精於音韻之學、著書已成、弟未及見、但
友人頗傳兄論音韻必旨上古、謂孔子未免有誤、此語大
駭人聽。因此度兄學益博、僻益甚。將不獨音韻爲然、
其他議論倘或類此、不亦迂怪之甚者乎。郤子語迂、單
子知其不免、況又加之以怪乎。此平生故人所以切切憂
之、願兄抑賢智之過、以就中庸也。

（前回いただきました手紙に音韻の學をきわめ著書も完成さ
れたとありました。まだ私は拝見しておりませんが、友人の
話では、音韻はきつと上古にのつとらねばならないとか、孔
子も誤りを免れないとかいう主張をされているようで、その
ような説は聞くものを大変驚かせるものです。ここから推し
量りますに、大兄は學問が進むほどにますます偏頗ぶりがひ
どくなっているようです。ひとり音韻の學のみならず、他の
議論についてもそのような傾向であれば迂遠怪詭なることこ
の上なくなってしまうのではないでしょうか。郤子の語が迂
遠であることで、單子は彼がその咎を免れないことが分かっ
たそうですが、⁽¹⁶⁾その上にさらに怪詭の説を加えたとなれば、
それはもうなおさらのことでしょう。このことは常々私が切

に憂えているところなのです。願わくば、どうぞ大兄には賢智の行き過ぎをほどほどになされて中庸につかれますように。

この文章は、『音字五書』『広韻』開離の翌年にあたる康熙七年（一六六八）に書かれたものである。「孔子未免有誤」が、これまた、『易音』における顧炎武の発言を指すこと、明らかである。この手紙が、顧炎武と親交厚く、帰奇顧怪（瑰奇古怪（＝奇人変人））とならび称された帰莊の手になったものであれば、顧炎武の『易音』における「五方之音雖聖人有不能改者」という発言が引き起こした波紋の大きさが知れる。毛奇齡の「五方之音説」にしまった反応も当時においては決して突飛なものではなかったのである。

ところで顧炎武の『周易』に関する見解は『日知録』の巻之一に五十条ほどがみえており、これらが『日知録』の冒頭に置かれていること自体が、顧炎武の『周易』に対する態度を示していると考えられるのだが、その内容をみて、『周易』の価値を疑うようなものはみあたらない。⁽¹⁸⁾ それどころか、『日知録』巻二十一「易韻」条には、「孔子作象象傳用韻、蓋本經有韻而傳亦韻。此聖人述而不作以古爲師而不苟也（孔子が象伝象伝に韻文を用いたのは、おもうに經

文が韻を踏んでいるのにもとづいて伝においてもそうしたのであらう。これはまさに聖人が祖述するのみで創作はせず、ただひたすらに古の道を模範としおろそかにしない姿勢を示すものである。）などという言及がみえており、ここからも顧炎武が孔子を聖人として認めており、貶めようという意図などないということが確かめられるのである。顧炎武は、儒教經典としての『周易』の価値を疑っていたわけではない。その「五方之音説」は、上古音研究における基礎資料としての『詩經』の絶対的価値を示すためのものであり、その意味で、『音字五書』敍における「三百五篇古人之音書也（『詩經』三百五篇は古の音韻体系を今にのこす韻書なのである）」という表現と表裏するものであったといえるだろう。

三 錢大昕による顧炎武批判

乾嘉の学、吳派を代表する碩学である錢大昕の学問は、史学を基底として、經義、声韻、訓詁、地理、曆法におよび、博綜かつ深究と称される。古無輕唇音説など音韻についても一家を成していた錢大昕による「五方之音説」批判を、今、次に引く『潜研堂文集』卷十五「答問十二」の中に見出すことができる。

問 古今言音韻者、皆以眞諄爲一類、耕清爲一類、而孔子贊易於此兩類往往互用。崑山顧氏因謂五方之音雖聖人有不能改者。信有之乎。

(古今の音韻を論ずるものは、みな眞諄を一類とし、耕清を別の類としていますが、孔子が易に伝をつけるにあたってこの兩類はしばしば通用されています。顧炎武はそれを方言音とみなし聖人にも改めることができないものがあるのだと述べていますが、本当にそうなのでしょうか)

曰 此顧氏之輕於持論以一孔之見窺測聖人也。夫士女之謳吟詞旨淺近、聖賢之制作義理闕深。深則難曉、淺則易知。『七月』末章已有岐音。『清廟』一什半疑無韻、非無韻也、古音久而失其傳耳。夫依形尋聲雖常人可以推求、轉注假借非達人不能通變。如但以偏旁求音、則將謂國風之諧暢、勝于雅頌之整牙。而周公亦囿於方音矣、有是理乎。……(中略)……顧氏知正音而不知轉音、有捍格而不相入者、則謬之於方音甚不然也。五方言語不通知其一而不知其它、是之謂拘於方。如「實」神質切亦讀如「滿」、「久」讀如「九」亦讀如「几」、易傳皆兼用之、此正聖人不拘方音之證。「民」「平」「天」「淵」亦猶是耳。顧可以輕議聖人哉。(それは顧氏が輕率に持論をもちだし、せまい見識でもつ

て聖人の境地を窺おうとしたものである。『詩經』は若い男女の吟詠したものでその内容は淺薄なものに過ぎない。

一方、聖賢の制作にかかる『周易』は、その義理は深遠である。深ければ理解しがたいし、浅ければ当然分かりやすいのである。そもそも顧炎武自身が、よりどころとしている『詩經』において、幽風「七月」の末章には「侵」韻字である「殷」が「東」韻字である「沖」字と押韻するという岐音の例をあげているのである。⁽¹⁹⁾ また、周頌「清廟之什」の大半の章について、無韻を疑っているが、なにもこれは無韻なのではなくて、古音が久しく伝承を失ったものなのである。⁽²⁰⁾ 字形を手がかりに字音を求めることは常人にもできるが、転注や仮借によつてそれを考察するとなると達人でなければ難しいのである。ただ諧声符のみによつて字音を求めようとすれば、国風の韻律はのびやかで、雅頌のごつごつした響きに勝るといふことになってしまう。そして周公もが方言にとらわれていることになってしまうが、どうしてそんなはずがあるだろうか。……顧氏は正音を知るのみで転音というものについて理解がないため、互いに齟齬しうまく説明できない状況がうまれますぐに方言音にかこつけてしまうのであるが、それは甚だしい間違いである。方言だから通じないのだという一点張りで、ほかの方

法をしらない、これをまさに「方に拘われる（＝枠にとら

われて融通性を失う）」というのである。たとえば、「夷」

字は神質の切であるが、また「満」音に読みなす場合があり、「久」字は「九」音で読まれるが、また「几」音で読

みなす場合がある。易伝はこの正音と転音とを兼用しているのであつて、これはまさに聖人は方言音にとらわれることなどなかったことの証なのである。「民」「平」「天」「淵」の問題もすべて同様である。どうして怪々しく聖人のしわざについて議論などできようものか）

やはり銭大昕も顧炎武の「五方之音説」に批判的であつた。『詩経』と『周易』という書物の成り立ちを考えれば、それは（儒教的な立場における）当然の帰結なのであろう。この点については毛奇齡も銭大昕も同様なのであるが、毛奇齡の古音五部説が顧炎武の古音十部説に劣っていたのに対し、銭大昕は『詩経』を根本資料とすべきだと主張する顧炎武自身が、『詩本音』において処理し切れていない部分を指摘することで、顧炎武の学説の不備を突き、それを乗り越えるかたちで、「五方之音説」を批判しているのが注目される。銭大昕がそのために導入したのは、正音、転音なる概念であつた。銭大昕はそれらを次のように説明し

てゐる。⁽²¹⁾

古人亦有一字而異讀者。文字偏旁相諧謂之正音、語言清濁相近、謂之轉音。音之正有定而音之轉無方。正音可以分別部居、轉音則祇就一字相近、假借互用而不通於它字。

其以聲轉者如「難」與「那」聲相近、故「難」从「難」而入「歌」韻。「難」又與「泥」相近、故「難」从「難」而入「齊」韻、非謂「歌」「齊」兩部之字盡可合於「寒」「桓」也。……中略……

其以義轉者如「躬」之義爲「身」即讀「躬」如身。詩「無遏爾躬」與「天」爲韻。易《震》「不于其躬、于其鄰」、「躬」與「鄰」韻、非謂「眞」「先」之字盡可合于「東」「鍾」也。

（古にもまた一字で数通りの読み方のあるものがあつた。その読音が文字の偏旁に合致しているものを正音といい、読み方の近いものを転音というのである。正音には一定の法則があるが、転音にはそういう決まりがない。正音は部に分かつことができるが、転音はただある特定の字となんらかの共通性があれば仮借しあつて通用するだけで、それが他の字にまで及ぶということはない。

音声面の共通性による転音の例として、たとえば「難」には「那」と声母において共通性があるため、「難」を構成要素とする「讎」が「歌」韻の字と押韻することがある。また、「難」には「泥」と声母に共通性があるため「難」を構成要素とする「讎」が「齊」韻と押韻することもある。しかし、だからといって「歌」「齊」両部の字がごとごとく「寒」「桓」韻と通押するのではない。……中略……

意味の共通性による転音の例として、たとえば「躬」の意味は「身」であるため「躬」を「身」字の字音で読むことがある。『詩経』の「無遏爾躬」では「天」と韻を踏んでいる。『周易』震卦の「不于其躬、于其鄰」では、「躬」は「鄰」と押韻している。しかしだからといって「真」「先」韻の字がごとごとく「東」「鍾」の韻と韻を踏むというわけではない。

正音とは、諧声符にもとづく、いわば正規の音である。一方、転音は変則的の字音ともいうべきものであり、声母あるいは字義の共通性という一定の条件の下、本来の字音でなく、他字の音で読まれるものということになるだろう。もとより通常は正音にもとづき押韻するのであるが、転音で押韻している場合、それを知らずに正音で読もうとするので押韻の認定と分部との間に齟齬が生じる、というの

が錢大昕の主張である。たしかにこのように考えれば、一定の状況の下でたまたま部立てを超えて変則的に押韻しているだけで、分部そのものには何の影響もないわけである。錢大昕は、先に挙げた「古今言音韻者、皆以眞諱爲一類、耕清爲一類云々」条の中で、顧炎武がお手上げであった『周易』『未済』の「極」「正」「革」の「炳」「蔚」「君」「豫」の「凶」「正」についてそれぞれが立派に押韻していると考えられることを、転音説を用いて証明してみせたい。さらに「象傳無不韻之句、獨此三卦顧氏所不能通而并刪其文、殊失闕疑求是之旨（象伝には韻を踏まない句はないのに、ただこの三卦だけは顧炎武もとうとう理解できずに、その文を削ってしまった）。これは疑わしきは聞き、ただ真実を求めるという学問の本旨に悖る行為である」と顧炎武を非難している。⁽²²⁾

錢大昕が、「顧氏謂一字止有一音、於古人異讀者、輒指爲方音（顧炎武はひとつの字にはただひとつの読み方しか認めなかったために、古人の読み方が正音と異なるものがあるとそれを方言ということにしてしまった）」と喝破したとおり、顧炎武の「五方之音説」は、協韻を認めないという顧炎武の立場から生じたものである。『音論』に「古詩無叶音」という一節を設けていることから分かるように、顧炎武は、「古

音は今音とは異なる独自の一貫した体系を有しており、一字に唯一の正しい字音がある」とする正音説（古本音説）に立っており、協韻説と相容れないのは当然であるが、そのためにどうしても押韻關係を説明できない状況が生じると「五方之音説」で処理せざるを得ないのである。転音説と協韻説との違いは、「古人有韻之文正音多而轉音少、則謂轉音爲協固無不可。如以正音爲協則偏到甚矣。（古の韻文は正音が多く転音は少ないのである。だから転音も協韻といえなくはない。しかし正音が協韻しているとみなすのは本末転倒も甚だし⁽²³⁾）」と錢大昕が述べている通りである。錢大昕の転音説は、正音説を維持しつつ、そこに、一部、協韻説的な考え方を導入することで、『詩経』の押韻状況には合わない押韻例を変則的なものとして認めながら、古音の部立て自体には影響を及ぼさないように、事態の打開をはかったものといえるだろう。『潜研堂文集』や『十駕齋養新錄』には、顧炎武の「五方之音説」に対する非難とともに、転音説が誇らしげに語られているのが散見される。⁽²⁴⁾ここではそのひとつをとりあげて本節の締めくくりとしよう。⁽²⁵⁾

知一字不妨數音、而辯其孰爲正、孰爲轉、然後能知音。知三百篇之音、然後無疑于易之音。予概深愛顧氏

考古之勤、而惜其未達乎聲音之變也。

（一字に數通りの讀音があつてもかまわないことを知り、そのどれが正音でどれが転音かを判断することができてはじめて古音が理解できるのである。『詩』三百篇の音韻に通じてはじめて『易』の音についても迷わなくなるのである。私は顧炎武の上古音研究における考古の功績を高く評価するけれども、惜しいかな、正音に通じるのみで転音には通じていなかったのである。）

むすび

以上、顧炎武の「五方之音説」に対する批判を、毛奇齡と錢大昕のものを中心にみてきた。そこには単なる学説の対立だけでなく、儒教という存在が彼らの思考を規制する枠組みとして濃い影を落としているのが看取された。彼らは音韻資料として『詩』と『易』のどちらを重視するかという問題と同時に、儒教の經典として両者をどう価値づけるのか、また、そのなかに孔子をどのように位置づけていくかという問題にも直面していた。そう考えると、例えば、毛奇齡による「此皆宋學解經陋習、不可不大聲疾呼以救正之者。因復著易韻以祛世惑。（これらはみな宋学による經典研究の弊害で、どうしても声を大にして正さなくてはならない

ものである。そこで私がさらに『易韻』という書物を著して世の虚妄を取り去ろうというのである⁽²⁶⁾」という発言も、単なる朱子嫌いの陽明学者による宋学批判とみるだけでは十分ではないような気がしてくるのである。また錢大昕は転音説を提出することで学説そのものの精度を高めているのと同時に、儒教経典としての『周易』の尊嚴確保にも一役買っていた。梁啓超は、『清代學術概論』において、「二百余年の學術史を総合して、全世界に及ぼした影響を一言でいうならば、『復古』をもつて解放とした」ことである。第一歩は、宋の古に復し、王学から解放された。第二歩は、漢・唐の古に復し、程・朱から解放された。第三歩は、前漢の古に復し、許慎・鄭玄から解放された。第四歩は、先秦の古に復し、いつさいの伝注から解放された。すでに先秦の古に復した以上、孔・孟から解放されるところまでいかざるをえない⁽²⁷⁾」と述べている。たしかにその通りではあるのだが、われわれはそのことを認めると同時に、清代の學術自体に自身を儒教の中に埋没・沈潜させていく契機が存在しているのも見逃してはならない。錢大昕による顧炎武説の止揚も儒教の埒外で行われることはなかった。彼らを包み込む儒教という建造物の堅牢さを思い知らされるのである⁽²⁸⁾。

顧炎武に対する批判は「五方之音説」に関わるものばかりでなく、その音韻觀にも向けられている。顧炎武の音韻觀は、古音は正しいものであり、今音はその正しい音から逸脱したものであるという音韻衰退史觀とでもいうべきものであった。『音学五書』敍の「天之未喪斯文、必有聖人復起、舉今日之音而還之淳古者（天が斯文を滅ぼさないのであればいつの日かきつと聖人が再び現れて今日の音韻を取り上げて淳朴であつた古のすがたにかえすことであらう）」ということばもそのことを示している。このような音韻觀に対する當時のいぶかりは、帰莊の手紙の中にもすでにあらわれているが、古音十部説を繼承・發展させた江永⁽²⁹⁾（一六八一〜一七六二）も、『古韻標準』例言において「顧氏音學五書與愚之古韻標準、皆考古存古之書、非能使之復古也（顧炎武の『音学五書』も私の『古韻標準』も上古の音韻を検討し保ち続けさせる書物ではあるが、現状を昔の状態に還すことができるというものではない）」と述べている。また、王鳴盛⁽³⁰⁾（一七二二〜一七九七）の『十七史商榷』卷八十二「唐以前音學諸書」には、次のような挿話が紹介されている。

顧寧人宿傳青主家。晨尚未起、青主呼曰、汀芒久矣。寧人怪而問之、青主笑曰、子平日好談古音、今何忽自昧之乎。寧人不覺亦失笑。古音天呼若汀、明呼若

芒。故青主以此戲之。然則古可好不可泥也。（顧炎武が傳山の家に投宿した時のことである。顧炎武が朝になっても起きてこないの、傳山が起こしにやつてきて、「汀芒久矣」と声をかけた。顧炎武は何のことだかわからずにたずねると、傳山は、「君はいつも古音を論じてばかりいるのに、何だ今のは分からなかったのかい」とからかった。顧炎武もおもわず苦笑いであったという。古音では「天」は「汀」のように読み、「明」は「芒」のように読む。そこで傳山はこれをつかって「古音でもって「もう外は明るくなっているぞ」と声をかけ」顧炎武をからかったのである。つまり古を好むのはよいことであるが、それに拘泥してはいけないということなのだ）

これも顧炎武の音韻観が当時どのように受け止められていたかを示す一話柄である。ところで江藩の『宋学淵源記』には、顧炎武と親交の厚かった李因篤（二六三—一六九二）が毛奇齡と古音について論じた際に、意見が合わず、毛奇齡が「強辯」したため、李因篤は憤懣やるかたなく、剣を抜いて斬りかかったという逸話が記されている⁽³²⁾。このような話をあわせ読むと、それらが事実であったかどうかはともかく、とかくしかつめらしい印象を与える清代古音学も血の通った人間の営為の結晶であったという、当たり前のことに改めて気づくのである。

一体にどの学術分野においても、その草莽期には、英雄的人物が登場し、大きな功績をあげるのが常である。しかしその学説が素直に継承され一本の道を進むがごとく発展していくことは、むしろまれであつて、まわり道や別れ道、紆余曲折を経て、徐々に精密になっていくものであろう。清代の学者の札記中に顧炎武説の訂正を企図するものを見出すことはしばしばで、それは何も音韻論に限ったことではない⁽³³⁾。本稿では、顧炎武の「五方之音説」を手がかりに、清代考証学の代表的分野ともいべき音韻論について、そのことをやや具体的に確かめたに過ぎない。学術史を形成していく、一人ひとりの学者たちのあり方も、またさまざまであれば、清代考証学という名で括られる学風を支える思潮もまた単線ではなく幾重にも複雑に交錯しながら流れていたに違いない。例えば、江永が、顧炎武の音韻観に疑問を提出する一方で、「崑山顧炎武寧人爲特出余最服。其言曰孔子傳易亦不能改方音……非具特識能是言乎（崑山の顧炎武は特に私が最も敬服する学者である。彼は孔子も易に伝をつけるにあたって方言音を改めることができなかつたと述べている……このような発言は優れた見識なしになしえようか）」⁽³⁴⁾とも記し、錢大昕が、顧炎武の学問に対する姿勢を批判しながらも、「顧氏講求古音、其識高出于毛奇齡輩萬倍、而大

有功於藝林者也（顧炎武の古音研究は、その見識の高さは毛奇齡などとはるかにしのいでおり學術に對する功績には大きなものがある）と書き残していることから分かるように。我々は、清代考証學というものを、先に挙げたような微笑ましい挿話の中に描かれている顧炎武ごととらまえてはならないのである。

注

(1) 崑山（江蘇省）の人。名は絳、字を忠清といったが、明朝滅亡後、名を炎武、字を寧人と改め、時に蒋山傭の変名を用いた。亭林はその号。

(2) 本稿における『音学五書』の引用は、京都大学人文科学研究所蔵の符山堂康熙六年刊本にもとづく。

(3) 顧炎武の古音十部説と後代の学説史については、以下の論著を参照のこと。頼惟勤「顧炎武の『詩本音』について」(一) (四)「『御茶の水女子大学人文科学紀要』第二十一巻三号・第二十一巻一号・第二十三巻一号・第二十四巻一号、一九六八～一九七一年」、頼惟勤『説文入門』（大修館書店、一九八三年）。

(4) 字は大可。清の蕭山（浙江省）の人。

(5) 字は堯徵。清の嘉定（江蘇省）の人。

(6) 「賓」も「真」韻で押韻字であるが、ここにおける顧炎武の議論には組み込まれていないので、傍点等を付さない。

(7) 同前。

(8) 同前。「身」は「真」韻所属字。

(9) 各部の表示は四声相配により、平声韻で代表させている。

(10) 「命」が所属する『広韻』去声四十三「映」韻の大半は顧炎武古音十部説では第七部に置かれているが、顧炎武は、「命」字のみをとりあげてこれを第四部所属字としている。「音学五書」詩本音「蛟螭」第三章の原注に「命」字について「古音彌吝反。考命字。詩凡九見竝同。後人誤入四十三映韻」とある。「彌吝反」であれば、中古音では、去声二十一「震」韻所属字、古音十部説では、第四部ということになる。ちなみに、「蛟螭」第三章では、「命」は、「人」「真」「姻」「真」「信」「震」と押韻している。

(11) 頼惟勤「清朝以前の協韻説について」『頼惟勤著作集Ⅰ 中国音韻論集』汲古書院、一九八九年。

(12) 『四庫全書総目提要』卷三十三「経問」を参照のこと。

(13) また、梁啓超も『清代學術概論』において清代學術の啓蒙期を代表する人物として顧炎武、胡渭、閻若璩の三人を挙げているのも興味深い。

(14) 帰莊。字は元恭。崑山（江蘇省）の人。

(15) 『帰莊集』卷五「與顧寧人書」。

(16) 『国語』周語下参照。

(17) 顧炎武による『広韻』重刊については、拙稿、「符山堂蔵板広韻重刊をめぐる」『文教大学文学部紀要』十九、一、二〇〇五年九月）参照。

(18) 四庫提要は、『日知録』の内容を、その配列順に、経義、政事、世風、礼制、科舉、藝文、雜論名義、古事真妄、史法、註書、雜事、兵及外国事、天象術數、地理、雜考と整理している。なお、現在普通に目にする三十二卷本『日知録』は、顧炎武の死後まとめなおされたもので、その編集には弟子の潘耒が深く関わっているが、これは初刻八卷本の次第を基本的に襲いながら増補していったものであると考えられる。

(19) 『詩本音』卷四参照。顧炎武は、同様の例を挙げたうえで、「若此者蓋出於方音耳」として処理している。

(20) 『詩本音』卷十参照。

(21) 『潜研堂文集』卷十五・答問十二「吳才老于三百篇有叶韻之說云々」条。

(22) たしかに『易音』には、『未濟』卦の初六、九二、『革』卦の九五、上六、『豫』卦の初六、六二の象伝がいずれも削られている。

(23) 『潜研堂文集』卷十五・答問十二「吳才老于三百篇有叶韻之說云々」条。同じ『潜研堂文集』卷十五・答問十二の「古言音韻者云々」条に「古人之立言也、聲成文而爲音、有正音以定形聲之準、有轉音以通文字之窮。轉音之例、以少從多、不以多從少」とあるのもこのことと同じ意味であろう。

(24) 『潜研堂文集』卷十五・答問十二「三百篇多以命與侵韻云々」条の「顧氏不得其說、概以方音議之、非也、同「顧氏論詩『母』字凡十七見云々」条の「顧氏不知音有正有轉、

輒疑轉音爲方音、故于此類未甚了了」、「十駕齋養新錄」卷一「易韻」の「顧氏拘于偏旁、謂一字不當有两音、故于此等未能了了」などがある。不規則な押韻例にも一定の条件を見出すという点で、錢大昕の転音説は顧炎武よりも一歩進んでいるものとみなせよう。王力は、『清代古音学』の中で、「真」「耕」の通韻は、主母音の共通性によるものであるとして、錢大昕の解釈を否定しているが、錢大昕が段玉裁に一定の影響を与えていることも事実であり、その点は見逃してはならないとおもう。

(25) 『潜研堂文集』卷十五・答問十二「顧氏論古音、皆以偏旁得聲云々」条。

(26) 『易韻』序。

(27) 梁啓超著・小野和子訳注『清代學術概論』(平凡社、一九七四年)、二、清代の思潮の変遷、十五頁。

(28) それが魯迅のいう鉄囲いの部屋であったのか、あるいは、彼らを育む卵であったのか、今こころではあえて問わないことにする。

(29) 字は慎修。婺源(安徽省)の人。

(30) 字は鳳喈。清の嘉定(安徽省)の人。

(31) 字は子徳、また天生。富平(陝西省)の人。

(32) 江藩『宋学淵源記』卷上「李因篤」の条。

(33) 例えば、錢大昕『十駕齋養新錄』には、卷十四に「日知録」、卷十六に「杜少陵詩用韻」、卷十九に「非三公而稱公」などがみえる。また、『日知録』四庫提要には、閻若璩が「潜

邱筍記』を作り『日知録』を正すこと五十余条であつたこと、若璩の女婿の沈儼がそれを序文に特記したこと、趙執信の手になる閻氏の墓誌中にもそれが記されていること、などが載せられている。

(34) 『古音標準』「例言」。

(35) 『潜研堂文集』卷十五・答問十二「吳才老于三百篇有叶韻之說云々」条。

(文教大学)